

觀心爲清淨圓明事

問。眞言教中有二月輪觀。微妙甚深有大功德。云云。法相亦有此證乎。答。未見正文。義勢非無歟。其證云。說佛果功德多云圓明。所謂或云性淨圓明故名無漏。或云引極圓明純淨本識等是也。圓・圓滿。萬德無闕故。明・明淨。性用無垢故。宛如世間滿月。問。佛果理智出障故圓明可爾。凡夫妄心常具煩惱。亦無一德。何觀之爲清淨爲圓明乎。答。理性清淨通凡聖位。本來自性清淨涅槃之義。依之方成。故論云。雖有客染而本性淨。具無數量微妙功德等。云云。不自性清淨。又具無數功德。圓明二義詳在此文。又勝鬘等說如來藏。則在纏位具衆德義也。次於智論之。無漏種子法爾具足。雖有惑障不能染之。本性住性則是也。問。無漏種子設雖有淨義。凡位未生現行。其相不顯。今何以妄染心爲清淨乎。答。寄有漏心觀無漏種子。是亦無違。但雖未現行。因既微妙。諸大乘教名之爲佛性。稱之爲如來。於因談果。聖教常說也。凡云因云果。不一不異。又現在心之上立過去未來。離現在世無有過未。大乘因果深妙離言也。佛智之前照凡夫心。本來清淨與佛無異。相性不二離性無相。因果不

心は清淨にして円明たるを觀する事

問ふ。眞言教の中に月輪觀有り。微妙甚深にして大功德有りと云々。法相にも亦此の証有りや。答ふ。未だ正文を見ざれども、義勢は無にあらざるか。其の証に云く、仏果の功德を説くに多く円明と云ふ。謂ふ所、或は性淨円明の故に無漏と名くと云ひ、或は引極円明純淨本識と云ふ等、是なり。円は円満なり。万徳欠ける事なき故に。明は明淨なり。性用は無垢なるが故に。宛も世間の満月の如し。問ふ。仏果の理智は障を出ずるが故に円明しかるべし。凡夫の妄心は常に煩惱を具す。亦一徳も無し。何ぞ之を觀じて清淨と爲し、円明と爲すや。答ふ。理性の清淨は凡聖の位に通ず。本來自性清淨は涅槃の義なり。依の方に成ず。故に論に云わく。客染有りと雖も本性は淨にして、無數量の微妙の功德を具す等と云々。只自性清淨ならず。又無數の功德を具す。円明の二義詳しく此の文に在り。又勝鬘等は如來藏を説く。則ち在纏位は衆徳を具すの義也。次に智に於て之を論ずれば、無漏の種子法爾として具足す。惑障有りと雖も之を染すること能わず。本性住性則ち是れ也。

問ふ。無漏の種子は設ひ淨の義有りと雖も、凡位にては未だ現行を生ぜず。其の相顯れず。今何ぞ妄染心を以て清淨と爲すや。答ふ。有漏心に寄りて無漏の種子を觀ずる。是れ亦、違無し。只未だ現行せずと雖も、因既に微妙なり。諸大乘教に之を名づけて仏性と爲し、之を稱して如來と爲す。因に於て果を談ずるは、聖教の常說也。凡そ因と云ひ果と云ひ、不一不異なり。又現在心の上に過去未來を立つる。現在世を離れて過未有ること無し。大乘の因果は深妙にして言を離る也。仏智の前に凡夫心を照さば、本來清淨にして仏と異なること無し。相性不二にして性を離れて相

義勢 || 意気込み
性淨 || 自性清淨
本識 || 阿黎耶識

在纏 || 煩惱の束縛の意。(如來藏は古來、在纏位の法身と解される。)
本性住 || 先天的に種子の存するもの
(|| 本性住種姓)

心は清浄にして円明であると観察する事

問。真言の教えの中に月輪観という観法が有り、微妙甚深で大功德が有ると云うが、法相にもまた此の証が有るだろうか。答。まだ正にそのことを書いた文を見ないが、同じ事が無い訳ではない。その証拠に云うならば。仏果の功德を説くのに多く円明と云う。なぜなら、或いは自性は清浄にして円明の故に無漏と名づくとい、或いは究極にみちびくのは円明にして純粹清浄の本識である。明は明浄である。性(本質)と用(はたらき)が無垢だからである。あたかも世間の満月のようなのである。問。仏の果である真理を知る智慧は障りを超えて出ているので円明であるのは当然である。凡夫の妄念の心は常に煩惱を具えている。また一つの徳も無い。どうしてこの煩惱の心を観じて清浄とし、円明とするのか。答。真理の本質としての清浄は凡夫も聖者も両方の位に通ずるのである。本来自性清浄とは涅槃の意義であり、依他起性のところに成就している。だから成唯識論に云う。客染煩惱が有るとはいつても本来は清浄であつて、無數量の微妙の功德を具えているのであるなど云う。ただ自性が清浄だけでなく、また無数の功德を具えているのである。円明の二の意義は詳しく此の文に説かれてい。また勝鬘經などは如来蔵を説くのである。すなわち在纏位＊の法身(如来蔵)は煩惱の束縛があつても多くの徳を具えているという意味である。次に智慧ということでは如来蔵を論ずるならば、無漏の種子は法の然らしむるままに具わっている。煩惱の障りが有るとしてもこれを汚染することはできない。本性住(先天的に種子の存するもの)という本質が則ちこれのことである。

問。無漏の種子はたとえ清浄という意義が有るといつても、凡夫の位ではまだ

現象として生じていなし、その様相も顕れていない。今どうして妄念に汚染された心をもつて清浄であるとするのか。答。有漏の心に寄つて無漏の種子を観じて、是れまた別のものではない。ただいまだに現実に微候が現れないといつても、因となるものが既に微妙なものなのである。諸の大乗教ではこれを名づけて仏性といい、これを称して如来とするのである。因において果を語るの、聖教の常に説くところである。おおよそ因といい果というのは、不一不異である。また現在の心の上に過去や未来を立てるであらう。現在の世を離れて過去や未来が有ることはない。大乘仏教の因果は深く微妙であつて言葉で語れているのである。仏智の前に凡夫の心を照してみれば、本来が清浄であつて仏と異なることは無いのである。様相と本質は不二であつて本質を離れて様相は無いのである。

月輪観 密教のあらゆる観法における基礎的な初歩の観法で、直径一肘(約五三センチメートル)の月輪

を画し、中に八葉の白蓮華を描き(蓮華の上に月を描く場合もある)、その上に金色の丸(阿字)を書いた掛軸に向かい、足を組んで坐し(結跏趺坐)、手に印を結び、呼吸を整えて、自分の心が月輪のごとしと観ずる。阿字観は、この阿字を唱え、内観が進んで阿字と蓮華と月輪との三観が成就し、阿字本不生の理を体得する観法である。

依他起性 因縁和合によつて生じ、因縁がなくなれば滅するもの。唯識説にいう百法のうち、六無為を除く他の有為法のこと。他の力によつて生じかつ滅するゆえに、有であつても有でなく、また無でもなく、これを假有法・非有似有の法と名づける。この中に虚妄分別の縁から生じた雑善の法である染分依他と無漏智の縁から生じた純淨の法である淨分依他とがある。淨分依他は円成実性に属することもある。

異離^レ因無^レ果。故涅槃經說^レ乳酪喻^一。人到^レ乳家^一問云。有^レ酪哉。答云有^レ酪。是^レ指^レ乳爲^レ酪。不^レ現既有。人具^レ佛性^一。可^レ知亦爾。意經小島・都作^レ二釋^一。但舉^レ事淺^一。觀^レ其理性^一爲^レ本義^一。仍以^レ世滿月^一爲^レ喻。觀^レ之無^レ過。但世間日月器界所攝也。一切器界。諸有情之共業所感也。我第八識恒時變^レ之。賴耶相分也。攝^レ相歸^レ心既在^レ心中^一。觀念尤應^レ歟。但如^レ予愚人不^レ堪^レ觀念^一。只以^レ心繫^レ心想^一。我心清淨猶如^レ滿月^一。分別漸少散亂聊止。心清身涼爲^レ滅罪之源^一歟。又可^レ誦^レ眞言^一。功力廣大之故也。冒地者菩提也。質多者・慮心也。・慮之心其性本淨。・是菩提大覺之體也。

問。眞如無相也。何以^レ有相月輪^一觀^レ無相理^一乎。答。凡夫心行不^レ能^レ頓入^レ無相理^一。故有相中此相少近^レ無相^一。與^レ衆物^一無^レ衆色^一故。如此漸漸遂入^レ無相^一。譬如^レ數^レ息故得^レ定。重意云。初數^レ息猶如^レ散心^一。散心之中稍寂靜遂住^レ定位^一。心地觀經云。凡夫所^レ觀菩提心相。猶如^レ清淨圓滿月輪^一。於^レ胸憶上^一明朗而住。若欲^レ速得^レ不退轉^一者。在^レ阿練若及空寂室^一。端身正念結^レ前如來金剛縛印^一。冥目觀^レ察臆中明月^一。作^レ是思惟^一。是滿月輪五十由旬。無垢明淨内外澄徹最極清涼。月・是心。心・是月。塵翳無^レ染妄想不^レ生。能令^レ衆生身心清淨^一。大菩提心堅固不退。云菩提心論引^レ經云。若無^レ勢力廣增^一。宜^レ信^レ

無し。因果は不異にして因を離れて果無し。故に涅槃經に乳酪の喩を説く。人、乳家に到りて問ひて云はく、酪有るや。答へて云はく、酪有り。是れ即ち乳を指して酪と爲す。現れずして既に有り。人、仏性を具す。知るべきこと亦爾り。經意なり。小島僧都二つの釈を作す。但だ事の浅なるを挙げて其の理性を觀じて本義と爲すか。仍ち世の満月を以て喩と爲す。之を觀するに過ぎたるは無し。但だ世間の日月は器界の攝する所也。一切の器界は、諸の有情の共業の感ずる所也。我が第八識は恒時に之を變ず。賴耶の相分也。相を攝して心に歸すれば既に心中に在り。觀念尤も心ずるか。但だ予の如き愚人は觀念に堪えず。只心を以て心を繫がむと思ふ。我が心清淨にして猶し満月の如ければ、分別は漸少し散亂は聊止せむ。心清く身涼きは滅罪の源と爲るか。又眞言を誦すべし。功力広大の故也。冒地は菩提也。質多は縁慮心也。縁慮の心は其の性、本より淨なり。即ち是れ菩提大覺の體也。

問ふ。眞如は無相也。何ぞ有相の月輪を以て無相の理を觀するや。答ふ。凡夫の心行は頓に無相の理に入ること能はず。故に有相中に此の相少しく無相に近し。衆物と衆色無きが故に。此の如く漸漸に遂に無相に入る。譬へば息を數へるが故に定を得るが如し。重ねて意を云ふに、初め息を數へるは猶散心の如し。散心の中の稍しき寂靜遂に定位に住す。心地觀經に云はく、凡夫の觀ずる所の菩提心の相は、猶ほ清淨圓滿の月輪の如し。胸憶の上に於いて明朗にして住す。若し速やかに不退轉を得むと欲すれば、阿練若及び空寂室に在りて、端身正念して前如來金剛縛印を結び、冥目して臆中の明月を觀察し、是の思惟を作せ。是の滿月輪は五十由旬にして、無垢明淨・内外澄徹・最極清涼なり。月即ち是れ心。心即ち是れ月。塵翳は染まること無く妄想は生ぜず。能く衆生をして身心清淨せしむ。大菩提心は堅固不退なりと云々。菩提心論に經を引きて云はく、若し勢力広増無くば宜しく法を信じ^{ひて}單に菩提

器界||器世間
縁慮心||慮知心。外界の対象を縁として思慮する心
心地觀經||大乘本生心地觀經(大正三
p.280)
阿練若||人のいない広野・荒野。森林。空閑處。修行僧の修行する場所
金剛縛||両手を合わせ、指をおおのに組む印の名
塵翳||不淨のかげり
菩提心論||金剛頂瑜伽中發阿耨多羅三藐三菩提心論(大正三十一 p.574c)

因と果は不異であつて因を離れて果は無い。だから涅槃經に乳酪の喩を説く。「人が乳業家に行き問うた、酪は有るか。乳業家は答えて云つた。酪は有る。そして牛乳を指して酪だと言つた。現れないが既に有る。人は仏性を具えていると知るべきことはまたこのようである。」(經の意)。小島僧都は二つの解釈をなした。但だ事物の浅いことを挙げ、その原理的本質を觀てそれを本質の意義とするのか。つまり世間の満月をもつて喩とする。これを觀るのに過ぎることは無い。ただ世間の太陽や月は器世間に属する所である。一切の器世間は、あらゆる衆生の共業が感ずる所である。自己の第八識は恒に之れを変えていく。器世間は阿頼耶識の相分である。様相を取り込んで心に帰れば、それは既に心の中に在るものである。觀念がもつともそれに応ずるものだろうか。ただ私のような愚かな人間は觀念の行に堪えられない。ただ心をもつて心を繋ぐと想うのである。私の心が清淨にしてちょうど満月のようにであれば、分別心は次第に減つて散乱する心は止むであろう。心が清く身が涼しければ滅罪の源になるだろうか。また真言を唱えるべきである。功德の力が広大だからである。「冒地(ボーデー)」は菩提である。「質多(チッタ)」は縁慮心である。縁慮の心のその本質は、本より清淨である。即ちこれは菩提大覺(さとり)の本体である。

問。真如は無相である。どうして有相の月輪をもつて無相の眞理を觀ずるのか。

答。凡夫の心のはたらきでは速やかに無相の眞理に入ることができない。それで有相の中でもこの相は少しは無相に近い。いろいろの物といろいろの色が無いからである。このように段々に進んで最後に無相に入るのである。喩えば息を数えることによって禪定を得ることができるようなものである。重ねてその

こころを云えば、始めに息を数えるのはちよつと散乱する心のようにであるが、散乱する心の中にわずかにある寂靜の心が最後には禪定の位に達するのである。心地觀經に云う。凡夫の觀る所の菩提心の様相は、ちよつと清淨円満の月輪のようである。胸中の憶いの上では明朗にして存在する。もし速やかに不退転を得ようと欲するのならば、阿練若や空寂室に在つて、身を端たし念こころを正して如来の前に金剛縛の印を結んで、冥目して心の中の明月を觀察し、この思惟をせよ。この満月の輪は五十由旬もあつて、無垢にして明淨であり内外に澄徹し究極の涼しさ(涅槃の絶対の境地)である。月は即ちこれ心である。心は即ちこれ月である。不淨のかげりに染まることなく妄想は生じない。よく衆生をして身心を清淨にさせる。大菩提心は堅固にして不退であると云う。菩提心論に經を引いて云うには、もし勢力(偉大な力・能力)の増大することが無ければ、よく法を信じてひとえに菩提心を觀るべきである。

心地觀經 大乘本生心地觀經(大正三 p.328c)

凡夫所觀菩提心相。猶如清淨圓滿月輪。於胸臆上明朗而住。若欲速得不退轉者。

在阿蘭若及空寂室。端身正念結前如來金剛縛印。冥目觀察臆中明月。作是思惟。是

滿月輪五十由旬無垢明淨。内外澄徹最極清涼。月・是心。心・是月。塵翳無染妄想不

生。能令衆生身心清淨。大菩提心堅固不退。

菩提心論 金剛頂瑜伽中發阿耨多羅三藐三菩提心論(大正三十一 p.574c)

故大毘盧遮那經云供養次第法云。若無勢力廣增益。住法但觀菩提心。佛說此中具萬行。漸足清白純淨法也。

法單觀「菩提心」。佛說此中具「萬行」。滿「足清白純淨法」。出離道取身惘然非「不聞其法」。只「不發其心也」。是則機與「教乖」。望「與分違」之故歟。欲「入心廣大之門」者。我性不堪。欲「修微少之業」者。自心「賴」。每「遇賢老」雖「問不答」。抑何法何行。似「淺而實深」。雖「大猶如易乎」。易故可「企」。大故可「賴」。初心之要以「之爲最」。而世間士女云。我心澄焉。我心涼矣。虛晴分月明。水澄兮影清。是其身心清涼之時也。縱雖「不向水月」。閑思「其形」。或語「其事」。自令「心悅」。佛法初門可「如是」。自心之性。本來清淨圓滿明朗。宛如「秋月」。適聞「此事」。未「隔我分」。密教之旨未「及習學」。設雖「不冥目結印」。聊思「惟妙理」者巨益不「空」。顯教中雖「無正文」。義勢大同。語異義一也。繫「心於此事」。至要非「一歟」。若語「可怖之事」者嬰兒聞戰。若憶「臭穢之相」。腸反吐「哺」。人依「事感」心淺深。命終見「十方佛」。往「生極樂世界」。又觀音正證「無生忍」。此呪力也。爾者云「彼云」。此皆不思議所致也。佛子六十年之間雖「空而過」。若數輩同法多日念誦之間。或一時或一音不「圖銘我心」。其德又有「達大聖」。以其威力「新生寶山」事。何以爲「」。若成「其願」亦非「他」。只可「云不思議事」。仍常念「神呪心不」思「別德」。總歸「不思議畢」。西方往生機劣土勝。因輕果重。然而現有「往生事」。舉「世不疑」。是只彌陀本願之威力也。而立「本願」之時。五劫思惟。其思惟計「之」。能知「不思議故歟」。不「爾爭發」。彼希有願「乎」。

心を観ずべし。仏説此の中に万行を具して、清白純淨の法を満足す。出離の道は取ける身の惘然として其の法を聞かざるに非ず、ただ其の心の発らざるなり。是れ則ち機の教と乖き、与の分を望みて之に違ふの故か。心広大の門に入らんと欲すれば、我が性堪えず、微少の業を修せむと欲すれば、自心頼み難し、賢老に遇ふ毎に問ふと雖も答へず。抑も何ぞ法、何ぞ行。浅に似て而も実に深し。大と雖も猶ほ易の如きなるや。易の故に企むべし。大の故に頼むべし。初心の要は之を以て最と爲す。而して世間の士女の云はく、我が心澄み、我が心涼しき矣。虚晴れて月明く、水澄みて影清きは、是れ其の身心清涼の時也。縦ひ水月に向かはずと雖も、閑かに其の形を思ひ、或は其の事を語りて、自ら心を悦ばせしむ。仏法の初門は是の如くあるべし。自心の性は本来清淨円満明朗なり。宛も秋月の如し。適ま此の事を聞きて、未だ我が分を隔てざれば、密教の旨未だ習学に及ばずして、設ひ目を冥じ印を結ばずと雖も、聊か妙理を思惟すれば、巨益空しからず。顕教の中に正文無しと雖も、義勢大同なり。語は異にして義は一也。心を此の事に繋ぐは至要一に非ざるか。若し可怖の事を語れば嬰兒聞きて戦き、若し臭穢の相を憶へば腸反りて哺を吐くは、人の事において心に感ずるの浅深に依る。命終に十方仏を見、極樂世界に往生す、又観音正しく無生忍を証するは、此の呪力也。爾れば彼に云ひ此に云ふは皆不思議の致す所也。仏子六十年の間、空しく過ぐと雖も、若し数輩の同法、多日念誦の間に、或は一時、或は一音、図らずして我が心に銘すれば、其の徳又大聖に達すること有り。其の威力を以て、新たに宝山に生まれむ事、何ぞ以て難と爲さん。若し其の願成ずることは、亦他に非ず。只不思議事と云ふべし。仍ち常に神呪の心を念じて別徳を思はず。総じて不思議に帰し畢りぬ。西方往生は機劣にして土勝る。因軽くして果重し。現に往生の事あり。世を挙げて疑わず。これ只彌陀本願の威力なり。而るに本願を立つるの時は五劫に思惟す。其の思惟はこれを計るに、即ち能く不思

惘然Ⅱがっかりしてぼんやりしているさま。茫然

士女Ⅱ男女

仏説は菩提心の中に万の行を具えて、清白にして純粋清浄の法を満足している。出離生死の道を受ける身としては、茫然としてその教えを聞かないのではないが、ただその菩提心が発ら^{おど}ないのである。これは則ち機が教えに乖^{そむ}いて、与えられる分を望んで教えに違^{ちが}うからなのだろうか。心広大の門に入ろうと思えば、私の性は堪えることができず、微妙な業を修行しようと思えば、自らの心は頼みにし難い。賢き先輩に遇うごとに問うてみても誰も答えてくれない。抑^{おさ}も何が法であり、何が行であるのか。浅いように見えて実に深いのである。広大といってもなお容易に見えようか。容易だからこそ企^{のぞ}むべきである。広大だからこそ頼むべきである。初心者にとつての要はこのことを以て最良とするのである。そこで世間の男女の云うには、私の心が澄み、私の心が涼ければこそ、空は晴れて月は明るく、水は澄んで写る月影が清い。これはその身心が清涼な時である。たとえ水月に向かわなくとも、静かにその形を思い、或いはその事を語って、自ら心を悦ばせるのである。仏法の初めの門はこのようにあるべきである。自分の心の本質は本来清浄円満明朗であり、ちようど秋の月のようである。たまたまこの事を聞いても、いまだに我の差別を隔てる(自心本来清浄を覚知することがないが、密教の趣旨をいまだに習学してなくて、たとえ目を閉じ印を結ばないといっても、わずかに微妙な真理を心に思うだけで、巨きな利益を得るのである。顕教の中に正しくそれを説く文章が無いといっても、その勢

いはほぼ同じである。言葉は異なっても意義は一つである。心をこの事に繋げば究極は一つではないのか。もし怖るべき事を話したならば幼子は聞いて恐れおのきのき、もし臭い穢い様子を憶えば腸がひっくり反り口中の食べものを吐くのは、人の事実とその心に感ずるところの浅深に依るのである。命終の時に十方の仏を見て、極楽世界に往生したり、また観音菩薩が正しく無生忍を証するのは、この呪の力である。だから往生のことをあちらで云いこちらで云うのは皆すべて全く不思議のなせる所である。仏子(貞慶)は六十年の間、空しく過ぎたといっても、もし数人の同じ法を求める仲間と、多くの日々に念誦をする間に、或いは一時、或いは一音でも、凶らずも自分の心に銘記することがあるが、その徳はまた大聖世尊に達することが有るのである。その威力をもって、新たに宝の山に生まれる事は、どうして難であるのでしょうか。もしその願いが成就することがあれば、また他のことではない。ただ不思議の事と云うべきである。よって常に神呪(陀羅尼)の心を念じて他の功德を思わない。総じて不思議に帰して終るのである。西方往生は機は劣であっても浄土は勝れている。因は軽くても果は重いのである。然るに現に往生したという事実がある。世間は挙げて疑うことがない。これはただ弥陀の本願の威力である。そして本願を立てられた時は五劫という時間を思惟された。その思惟はこれを推測すれば、即ち能く不思議ということを知っておられたためであろうか。

隨又有行無行善人惡人以輕微業因勸聖衆來迎。

聖衆已現・往生無疑。但眞實淨土業成就。多在彼

聖衆攝取暫時之間歟。不爾爭最下凡夫以羸淺之

・忽生微妙之淨土。永得不退轉利乎。是則不思議

中之不思議也。予深信西方故。竊廻此案。不同學者

性相之疑。又不同世人一向之信。恐於一期所作。以

前稱念等感佛雖大。多猶疎因也。眞實正因正業見

瑞相之後發希有心。或開略法。或依所被。雖暫時可

住大乘心。然後正可生淨土也。其瑞相不思議併是

佛實法實不思議也。病席雜談多在觀音補陀落事。

初心同法等云。此事欲廢妄粗令記如何。答云。有何

事乎。仍始少少思出先言有被書付之人上。又云。或失

或背。只此事以口筆可書之。云其後乍臥出詞。首

尾散散歟。又注付之後。自未見之。氣力之衰遂日。微

音言語不分明。定多其誤歟。如此物在外流布。人生

惡氣。其憚非一。爲之如何。

建曆三年正月十七日記之

同年二月三日辰初御入滅

元亨三年正月廿二日令書寫了

爲興隆佛法 爲利益衆生

欣求淨土 憲・

議を知る故か。爾らず、淨か彼の希有の願を發せむや。隨て又有行・無行・善人・

惡人、輕微の業因を以て聖衆來迎を勸む。聖衆已に現ずれば往生疑いなし。但し眞

實淨土の業成就は、多く彼の聖衆撰取せる暫時の間に在りや。爾らず、淨か最下の

凡夫羸淺の縁を以て忽ちに微妙の淨土に生まれ、永く不退轉の利を得むや。是れ則

ち不思議中の不思議也。予は深く西方を信するが故に、窃かに此の案を廻らす。学

者性相の疑に同ぜず。世人一向の信に同ぜず。恐らくは一期の所作に於いて、以前

の稱念等は仏を感ずること大なりと雖も、多くはなお疎因なり。眞實の正因正業は

瑞相を見て後に希有の心を發す。或は略法を開き、或は被むる所に依つて、暫時と

雖も大乘の心に住すべし。然る後に正しく淨土に生ずべきなり。其の瑞相不思議と

併びて是れ仏宝法寶不思議なり。病席の雜談は多く觀音補陀落の事に在り。初心の

同法等云はく、此の事廢妄せんと欲す。粗記せしめては如何。答へて云はく、何事

有りや。仍ち始め少々先の言を思い出だして書き付けらるるの人有り。又云はく。

或は失し、或は背く、只此の事口筆を以て之を書くべしと云々。其の後臥し乍ら詞

を出だす。首尾散散なるか。又注付の後は自ら未だ之を見ず。氣力の衰へは日に逐

ひ、微音の言語分明ならず。定めて其の誤り多きか。此の如きの物、外に在りて流

布すれば、人惡氣を生ぜむ。其の憚り一に非ず。之れ如何に為む。

建曆三年正月十七日之を記す

同年二月三日辰の初め御入滅

現行年正月廿二日書写しめ了ぬ

興隆佛法の為 利益衆生の為

欣求淨土 憲縁

そうでなければ、どうしてあの希有の願を發されることがあるか。随つてま
た行の有る者にも行の無い者にも善人にも悪人にも、取るに足らない輕微の業
因をもつて聖衆來迎を勧めたのである。聖衆が已に現れたならば往生は疑いな
い。ただし眞実浄土の業が成就するのは、多く彼の聖衆が撰取る暫くの時の
間に在るのであるか。そうではない、どうして最低の凡夫の粗雑な淺薄な縁
をもつて忽ちに微妙である浄土に生まれて、永く不退轉の利益を得ることがあ
ろうか。これは則ち不思議中の不思議なのである。私は深く西方浄土を信ずる
ので、ひそかに此の考えを廻らした。学者の法相宗学の疑いにも同調せず、世
人の一向の信仰にも同調しない、恐らくはこの一生の所作において、以前の称
念などの行は仏を感じるが大いにあつたとしても、その多くはなお疎因な
のである。眞実の正因正業は聖衆來迎の瑞相を見て後に希有の心を發すこと
である。或いは略法を開いたり、或いはいただいた所に依つて、暫くの時とい
つても大乘の心に住すべきなのである。然る後に正しく浄土に生まれるべきであ
る。その瑞相不思議と併んで仏宝と法宝と不思議なのである。病の席で雑談す
ることは多く觀音補陀落の浄土往生の事であつた。初心者の御同行等が云うに
は、此の事を忘れるかも知れない。概要を記録させてはどうだろうか。答えて
云つた、何事か。すなわち始めに少々前の言葉を思い出して書き付けた人が有
つた。また云うには、或いは忘れ、或いは師の言葉に背くこともある、ただ此
の事を口頭筆記をもつてこれを書くのがよろしいのではないかと。その後床に
臥しながら語つたことであるから、首尾一貫していかないかも知れない。また注
を付けた後は自分ではまだこれを見ていない。氣力の衰えは日に日に進み、小
さい声での語りは鮮明ではないから、きつとその誤りが多いのではないだろう

か。このような物が、外に出て世に流布すれば、人は悪い氣を發すであらう。
その怖れは一つではない。これを如何にしたものだろうか。

建曆三年正月十七日にこれを記した

同年二月三日辰の初め御入滅なされた

現行年の正月廿二日に書写し了つた

興隆仏法の為 利益衆生の為である

欣求浄土 憲縁

阿頼耶識 アーラヤ識。個人存在の根本にある通常我々が意識することのない識であつて、眼・耳・鼻
・舌・身・意・末那・阿頼耶の八識の最深層に位置するとされる。瑜伽行派独自の概念である。(阿
頼耶識)とは、サンスクリット語アーラヤの音写と、ヴィジュニャーニャの意訳(識)との合成語
であり、玄奘以前の漢訳仏典では(阿黎耶識)(阿梨耶識)と表記される。アーラヤとは住処の意で
あるとされ、そこに過去のすべての經驗の潜在余力(習氣)が蓄積されている蔵のような存在であ
るから(蔵識)訳される。この習氣は、現在および未来における自己の身心および対象世界(現行
法)、すなわち一切諸法(一切法)を生み出す因となるから種子とも呼ばれ、それら一切法の種子を
保つ阿頼耶識のことを(一切種子識)ともいう。このように万有は阿頼耶識より縁起したものであ
るとする唯心論的な理論のことを、通常、(阿頼耶識縁起説)と称する。

この識は個人存在の中心として多様な機能を備えているが、その機能に応じてほかにもさまざま
な名称をもつて呼ばれている。過去の善悪業の報い(異熟)として生じた点からは(異熟識)と呼
ばれ、他の諸識の生ずる基である点から(根本識)と呼ばれ、身体の感覺機能を維持する点から(阿
陀那識)(執持識^{しき})と称せられる。このように阿頼耶識は、過去の經驗を保持しつつ、身体を維
持し続けながら恒常的にはたらくのであるが、あくまでも一瞬一瞬に生じては滅すること(刹那滅)
を繰り返しつつ持続(相續)する無常なる存在であるから、永久不変の実体的な自己存在(我)と
混同されてはならないという。

阿頼耶識は、通常迷いの生存の根底として機能するのである、しかし見道以後は悟りの諸法も
また阿頼耶識から生ずるとされる。インドにおいても一部の文献では、さらに進んで阿頼耶識と如
來藏を同一視する考え方も現れており、こういった動きを受けて玄奘以前の中国では、阿頼耶識の
本質は、清らかな真識であるか、汚れた妄識であるかをめぐる論争が生ずることになった。